



## ○文・理

「台形の面積を出す公式は『(上底+下底) ×高さ÷2』だったよね。」という職員室での雑談から始まりました。そして「今の仕事上、面積を出す計算が必要となる場面はほとんどない。」というつぶやきも出てきます。それは「文系の生活に学校で習う算数・数学はどれくらい必要か」という議論につながります。特に中・高校生するときには将来使いそうにもない難しい公式なども覚える必要があり、文系の私は苦勞した思い出があります。「算数・数学が何の役に立つの?」という小・中学生の問いに応えなければならない立場になってからは、いろいろな“理由”を考えるようになりました。

少し前、映画を観ました。「ドリーム」という題名です。1960年代のNASAで数学者として開発を陰で支えた女性たちの物語でした。劇中では宇宙船が地球に帰還する際、どの地点に着水するかを正確に計算しなければならない場面がありました。宇宙船のものすごい速度や大気圏突入の角度、落ちていく放物線の予測など膨大な数値を整理する必要があります。直接飛行士の命にかかわる“宿題”なので、数値の計算といえども私の定期テストでの苦勞とは比べ物になりません。結果は見事に予想通り宇宙船が帰還し、プロジェクトが成功に終わりました。この物語はまさに理系の人物が活躍する場面を描いていたわけですが、文系の私でも感動をもらいました。しかし、文系の人間が直接的に数学の力を発揮する場面はほとんど形に現れません。それではなぜ文系にも数学が必要なのでしょうか?

ある中学校の生徒で数学が苦手な野球部員たちに「守備に就いているとき、打球の角度と初速を瞬時に判断して放物線をイメージし、どこにボールが落下するかを予測してフライをキャッチしてるだろ?」というようなことを伝えたことがあります。その生徒たちはきょとんとしていましたので、私の話は理解されていなかったであろうと思います。また、あることを他者に説明し、納得させるためには文章力だけでなく、説得の根拠を理路整然と説明する力が必要ですし、あらゆる資料を活用して説明のプランを構想する力も必要です。これらは数学での公式を導き出す作業と似ているところがあると私は思います。形には現れないけれども文系の人間も「数学的なものの見方・考え方」は結構使う場面が多いと私は思っています。算数の苦手な小学生に説明するのはなかなか難しかったですけどね。

さて、理系の人間に国語力や美術の鑑賞力などがなぜ必要かと考えてみます。「たより 82号」の続きのようになってきました。映画「ドリーム」の中で、宇宙飛行士が数学者の主人公に伝える場面があります。「コンピュータという機械がはじき出した数値よりも君たちが計算してくれたものの方を私は信用する。」映画の中の正確なセリフは再現できませんでしたが、ほぼこのような内容だったと覚えています。このことばは上記問いへの回答を導き出す手助けとなりそうです。

最後に余談。「スポーツも賢い人間の方が大成する。」ということを知ったことがあります。「賢い」という語句は誤解を生みそうですが、言おうとしていることは理解できますよね。以前勤めていた中学校の陸上部が、私が転勤した後県の駅伝大会で優勝しました。「私がいるときに快挙を成し遂げてほしかったな。」と心の中で思っていました。そういえばあの時のメンバーは“賢い”連中がそろっていたような。



Wikipedia から